

# 利水開発による水源地の変容及び都市との関連

—横浜水道を通しての相模湖町と横浜市—

水源地	都市	集落
利水開発	変容	工業地帯

正会員	○ 広瀬和也*
同上	中谷礼仁**
同上	石垣敦子*
同上	久保響子*
同上	坂東真以*

## 1. 研究の背景と目的

神奈川県津久井郡の山間に内郷村という村落が存在していた<sup>1</sup>。その村落は、大正期において柳田國男、今和次郎らによって日本近代初の組織的かつ総合的な村落調査の対象となっていた<sup>2</sup>。そこで、約 90 年経過した現在において、景観の変容を定点観測するために、我々は内郷村の調査を行う事にした<sup>3</sup>。すると際立った変化として、大正期の調査段階では確認できた村落の一部が横浜の利水開発によって造成された相模湖の底に沈み、一帯は水源地と化していた。この事実は、水源地となった内郷村の変化が都市の近代化に併行した結果としてもたらされたことも示唆している。それでは以上のような利水開発は、都市を主体として村落を変容させる行為であるとしても、一方的のみ成立していたものであったのだろうか。本研究は、横浜市・相模湖町に代表される当地の利水開発を通して水源地と都市との相補的な発展過程を具体的に明らかにすることにより、それらの関係性を再検証することが目的である。

## 2. 研究方法

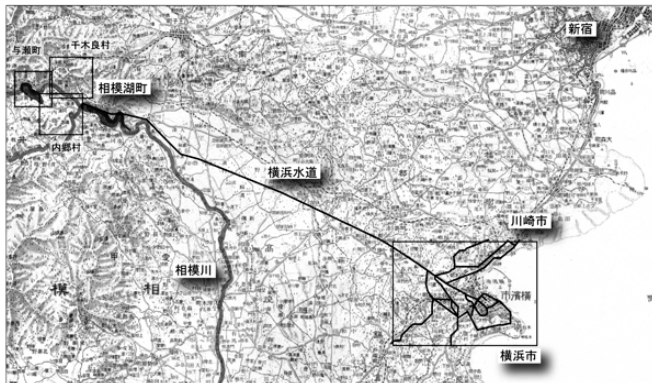


図1 横浜水道全体図

内郷村を含む相模湖町では、戦後や 1960 年代の高度成長期に併せて、横浜の水供給を目的とした大きく二つの利水開発<sup>4</sup>が行われ、その都度湖が造成された。本研究は、以上の利水開発を通して水源地と都市双方の発展過程について、各年代の地形図<sup>5</sup>と文献とを用いて分析した。その手順として、まず利水開発が水源地に与えた影響を具体的に把握するため、与瀬町・内郷村・千木良村と三つの地域を対象に利水開発後の物理的な影響を探った。次に、横浜市において利水開発が都市にもたらした影響を地勢的な広がりから分析する。

## 3. 利水開発が水源地へ及ぼした影響 利水開発と水源地

まず、各町村の中でも相模湖に最も隣接する与瀬町を例に挙げる。与瀬町は、甲州街道沿いの集落であった。図 2 に示すように、昭和 29 年には、相模湖が造成され、湖岸整備・旅館

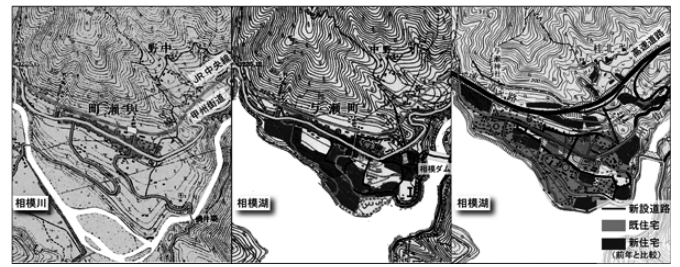


図2-1 与瀬町 昭和4年 図2-2 昭和29年 図2-3 昭和44年  
と住宅数の増加・道路整備等の変化が見られる。さらに、昭和44年には、鉄道の複線化・宅地開発・道路改修といった変容が見られる。これら各々の要素の関係は、利水開発から直接影響を受けた要素が他の要素へ次々と連鎖的に影響を与え、村落を発展させている。同様に他村落の各要素の変容を確認し、図3のように整理すると、二次的三次的な影響を複数確認する事が可能となった。



図3 利水開発が相模湖町へ及ぼした影響連鎖図

#### 4. 利水開発による横浜市の都市形成-利水開発と都市-

横浜市は、横浜水道を創設以降、住宅地・工業地域の増加が著しい。第一次世界大戦の好景気により、重工業の需要が増し、関東大震災の復興に併せて、住宅地・工業地域が増殖した。これに伴い、横浜水道は現在まで幾度となく拡張工事が行われている。ここでは、住宅地・工業地域の増加と横浜水道の拡張との関係を具体的に検証してみる。

##### (1) 建物密集地域の増加

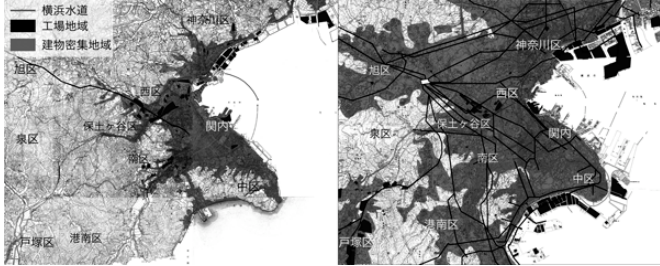


図4-1 横浜市 大正10年

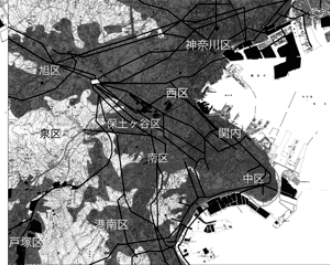


図4-2 昭和44年

港町で知られる横浜市は、開港後、都市計画のほとんどが公園や臨海の工業地帯及び埋立地を対象としてきた<sup>6</sup>。一方で、住宅地が西方へ無秩序に拡大しているかの如く見える。しかし実際は、宅地開発をする上で水道が不可欠であったため、水道に沿って住宅地が拡大しているのである。(図4)

##### (2) 工業地域の分布

工場地域は、建物密集地域と異なった広がりが見られる。明治以降には、工場地が貿易港を中心に配置されていた。しかし、これらは、戦後・高度成長期において、中心地から外れた郊外地にも見られる。中でも、戸塚区では工業地帯が著しく増加しているため、詳細に検証したい。



図5-1 戸塚区 昭和4年 図5-2 昭和29年 図5-3 昭和44年

昭和4年の戸塚区においては、水道もなく工場がほぼ見られない。図5を順に追ってみると、まず水道が敷設され、その水道沿いに工場が増加していることが確認できる。ここで、横浜市の発展を支えてきたものの一つとして、横浜水道が影響していることがわかる。水道は、都市の発展を支えると同時に、住宅地・工業地域の需要にも対応していたのである。さらに、工場や住宅の立地には、水道の通過線を中心として発達していることが見受けられる。

こうして、地下の不可視な部分で都市基盤を形成している横浜水道が、都市の発展に伴いその需要を満たしてきたことを確認できた。横浜水道が横浜市という巨大都市の迅速な発展を支えていた主要素の一つなのであった。

#### 5. 考察・水源地と都市の関係

相模湖町と横浜市各々を横浜水道の利水開発を通して、その発展過程を分析してきた。これらを時系列的に並べ相模湖町と横浜市の関係を考察する。

- ①明治20年 農村相模湖町と港町横浜は、水道により初めて繋がった。
- ②人口増大や関東大震災復興と工業地帯発達により、水需要が高まり、水道は拡張されていった。
- ③昭和22年 相模川河水統制事業の完成により、水が横浜市に大量に供給された。その結果、京浜工業地帯が発展した。
- ④昭和38年、相模湖町がオリンピック地開催地に選定された。それに伴い、道路の誘致・整備が行われた。相模湖は横浜への水供給以外に相模湖町に観光地化をもたらした。
- ⑤昭和40年 さらに都市への水需要が高まり、津久井湖が造成された。水道が増設され、その結果水道沿いに宅地・工場が建設されていく。
- ⑥昭和50年 横浜、相模湖町間の幹線道路敷設により、人の往來の便がよくなる。そのため、大学や大型観光施設建設を相模湖町に要求し始める。

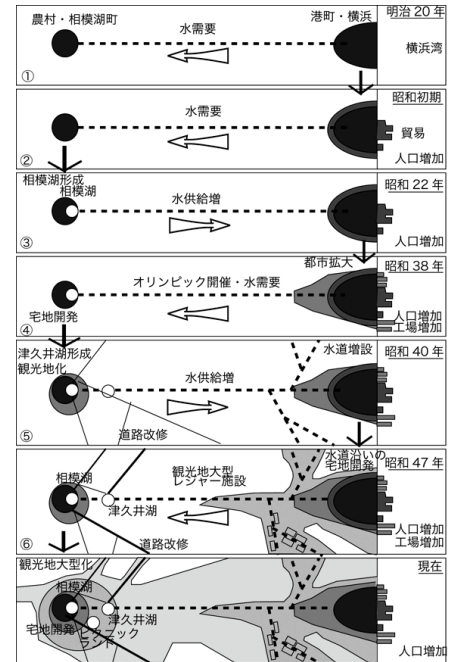


図6 水源地と都市の関係

⑤昭和40年 さらに都市への水需要が高まり、津久井湖が造成された。水道が増設され、その結果水道沿いに宅地・工場が建設されていく。⑥昭和50年 横浜、相模湖町間の幹線道路敷設により、人の往來の便がよくなる。そのため、大学や大型観光施設建設を相模湖町に要求し始める。以上のように、相模湖町と横浜の関係性が指し示すのは、水源地と都市において、需要と供給が連続して立ち代わる、相互的な発展関係なのではないだろうか。

#### 6. 結論

横浜水道を通して、相模湖町及び横浜市の発展関係を分析・考察してきた。都市化の波が押し寄せられた村落は、一見すると都市からの影響が主要に見える。しかし本研究のように利水開発を通して、水源地と都市をみた場合、需要と供給が交互にフィードバックを繰り返しながら発展する関係が示されたと言える。

<sup>1</sup> 内郷村は、周辺の市町村と編入・合併し、現在相模原市の一部となっている。  
<sup>2</sup> 柳田國男が統率した郷土会と白茅会の合同で組織的村落調査が大正11年行われた。参加者の中には、小田内道敏、佐藤繁男、今和次郎、石黒忠篤と各界著名人がいた。  
<sup>3</sup> 2006年8月末、瀝青会という調査団の活動の一貫として行われた。この調査活動は、文部科学省・科学研究費による助成研究番号18656182「今和次郎『日本の民家』再訪を通して日本の居住空間・景観の変容調査」の一部である。  
<sup>4</sup> 明治20年に創設された横浜水道は、昭和22年に相模川河水統制事業、昭和40年に相模川総合開発事業、平成12年に宮ヶ瀬ダム建設事業、と総計8度に及び利水開発水道拡張工事を行っている。  
<sup>5</sup> 「横浜水道導水経路図」(『横浜水道百年の歩み』横浜市水道局1987より)及び国土地理院発行の地形図T10、S4、S26、S36、S46、H10の計6枚を用いている。  
<sup>6</sup> SD 編集部『横浜市都市計画の実践的手法-その都市づくりの歩み』鹿島出版会1980